

尾崎士郎記念館企画展

「尾崎士郎と酒」 特集

平成21年 7月28日～平成22年 1月17日



吉良町上横須賀の旅館
「大竹屋」での宴会写真

昭和20年代

士郎の30年ぶり帰郷を
喜ぶ横須賀村の幹部（前
列）や同級生ら。士郎を
囲む参加者の屈託のな
い笑顔が印象的である。

■ 開催にあたって

「酒」を抜きにして、士郎の人生を語ることはできないでしょう。「朝起きて必ずコップに1杯もしくは2杯。昼に1杯。夜になると臨機応変」で、「若い頃（特に30代）は、1斗樽を机の上に置き、興にまかせて飲みながら原稿を書いた。」といひます。

親交のあった多くの方が、士郎との酒にまつわる愉快的思い出を語っています。宴たけなわとなると、裸になって浪花節を披露し、さらに、ひいきの力士の土俵入りをはじめ、徹夜もしばしばであったといひます。また、士郎は下積みの文士や、駆け出しの若い編集者が自宅を訪れても、気さくに家に入れ酒をすすめました。酔いがまわっても謙虚でひかえめで、実業家、画家、力士、棋士、政治家、また故郷吉良の人々など、相手の地位や名声にこだわらず酒を酌み交わし親交を深めました。

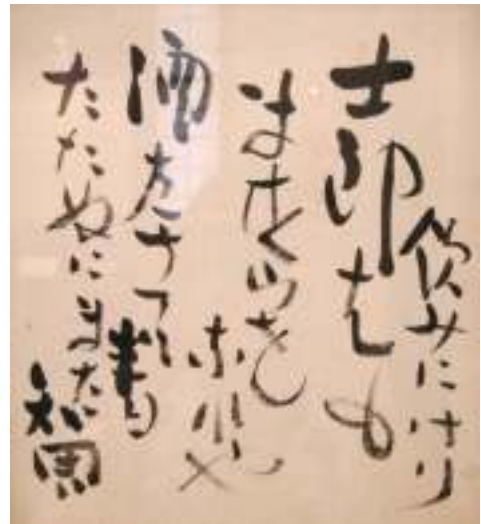
今回の企画展では、多くの人を惹きつけてやまなかった士郎の人間的な魅力を、酒をとおして紹介したいと思ひます。



中川一政筆『人生劇場 青春篇』挿絵原画

「都新聞」に昭和8年3月～9月に連載され、後に爆発的な人気を博した土郎の代表作『人生劇場』の挿絵原画。中川一政は著名な画家で、土郎の『人生劇場』各巻のほか、多くの土郎作品の挿絵や装丁を担当している。

図は瓢箪らが、女中のお袖を目当てにかよった「流水亭」。柴又の川魚料理「川甚」がモデルで土郎自身もよく友人らと訪れた。



土郎に贈られた色紙(作家の添田知道筆か)
「土郎者も ますらをなれや 酒たちも 半日たために また飲みかけり」とある。

■ 土郎と酒

土郎の作品はすべて酒を飲みながら書かれたといっても過言ではありません。本人いわく、「飲むにつれて次第に理論が整然として」執筆が進んだといいます。

土郎は、昭和16年に陸軍宣伝班員としてフィリピンに従軍しますが、派遣後1年で胃潰瘍のため帰国しました。その後、伊豆の伊東に疎開しますが、胃潰瘍が完治せず、何度も禁酒を決意します。雑誌で禁酒を宣言したり、部屋に禁酒と書いた紙を張ったりしましたが、半日も持たなかったといいます。



舟司まな板 土郎書「青きは鱧の肌にして黒きは人のこころなり」は、土郎お気に入りの浪花節(浪曲)の一節で酒が入ると好んで歌った。

■ 雑誌『酒』

雑誌『酒』は、当初株式新聞社が発行していましたが、昭和31年に編集記者であった佐々木久子氏が経営を引き継ぎ、平成9年まで40年間にわたって刊行された雑誌です。酒之友社の経営は厳しく、土郎をはじめ、火野葦平、丹羽文雄、壇一雄、江戸川乱歩など、酒を愛する作家たちの寄稿によって支えられました。佐々木氏自身も酒にま



土郎直筆 雑誌『酒』「私のさかな」原稿 昭和33年1月号掲載
土郎は好きな酒の肴として、かまぼこなどを挙げ、他に吉良のもずく・このわた・海老せんべいなども好んだという。

つわる随筆を多数著していますが、平成20年6月に逝去されました。

佐々木氏は昭和60年に士郎を慕って吉良を訪れ、当館に雑誌掲載の士郎直筆原稿などを寄贈されています。

■ 士郎の愛した酒「賀茂鶴」^{かもづる}

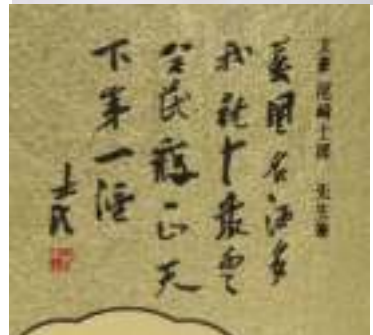
士郎は、広島酒どころ西条（東広島市）の「賀茂鶴」を生涯好んで飲みました。賀茂鶴酒造は明治時代から日本酒の海外輸出を手がけ、昭和33年には、初めて大吟醸酒を発売したことで知られる老舗の酒蔵です。

当時、賀茂鶴酒造の東京支社に勤務していた石井泰行氏（後の社長、現会長）は早稲田大学の後輩ということもあり、士郎と親しい間柄でした。

■ 故郷吉良での酒宴

士郎が20歳の時、実家で郵便局長を務めていた長兄の重郎が、公金を使い込んだ後にピストル自殺を図りました。生家「辰巳屋」は破産、士郎は以後30年間帰郷を果たすことができませんでした。GHQから追放令を受け、体調も優れず意気消沈していた昭和22年に、同級生らの招待を受け故郷を訪問しました。町民からの歓待に感激した士郎は、帰郷を題材とした作品をいくつか発表しました。

実家を失った士郎のために、地元の有志により「瓢山会」^{ひょうざんかい}が結成され、士郎の宿舎として横須賀に「瓢山荘」^{ひょうざんそう}が用意されました。その後、士郎は毎年のように帰郷し、その度に町の有力者や気心の知れた同級生らが集まり宴会が催されました。



「賀茂鶴 特別大吟醸双鶴」とラベルの士郎書

「崇国（安芸国）名酒多し。我なかんずく賀茂鶴を最も愛す。正に天下第一の酒」と絶賛している。



上横須賀の旅館「大竹屋」での宴会写真

士郎は吉良を訪れると、生家「辰巳屋」に近い旅館「大竹屋」もしくは、吉良吉田の料理旅館「喜遊亭」に泊まった。



胃薬 ロシュ社製「シントロゲル」
胃潰瘍回復後も胃酸過多に悩まされた士郎は、胃薬を手放せなかった。

展示品リスト

No.	資料名	年代	種別	備考
1	水野成夫氏を囲む会写真	昭和35年	写真	当時、水野成夫は産経新聞社長
2	青野季吉 色紙「良寛酒の歌 さす竹の 君がすすむる美酒に われ酔ひにけり その美酒に」	不明	書色紙	青野季吉は佐渡出身の作家・文芸評論家
3	色紙(筆者不詳)「士郎君も ますらをなれや 酒たちちても 半日たために また飲みにけり」	不明	書色紙	筆者は作家の添田知道か
4	『人生劇場 青春篇』 初版本	昭和10年3月	書籍	竹村書房発行
5	『人生劇場 青春篇』挿絵原画(柳水亭で女中のお袖の手をとる夏村大蔵)	昭和8年5月22日(月)	挿絵原画	中川一政鑑
6	『人生劇場 青春篇』挿絵原画(柳水亭の瓢太郎と吹岡)	昭和8年5月26日(金)	挿絵原画	中川一政鑑
7	士郎書「兩人酔に対し 山花開く 一杯一杯又一杯・・・」	不明	士郎書和紙	
8	『酔中放談』	昭和35年11月発行	書籍	河出書房新社
9	寿可まな板 士郎書「青きは續の肌にして黒きは人のころなり」	不明	士郎書まな板	「銀座すし好 築地喜楽」焼印
10	佐々木久千 色紙「誰がために 粧ふ紅や 月あかり」	昭和60年	書色紙	吉良町訪問時に詠む
11	雑誌『酒』付録「女壇酒徒番附」	昭和38年1月号	番付表	
12	士郎直鑑原稿「私のさかな」 雑誌『酒』掲載	昭和38年1月号	士郎直鑑原稿	
13	雑誌『酒』	昭和38年1月号	雑誌	士郎 扉「酒」掲載
14	士郎直鑑原稿「酒中の人」 雑誌『酒』掲載	昭和32年6月号	士郎直鑑原稿	
15	雑誌『酒』 物故作家特集号	昭和60年8月号	雑誌	士郎原稿再録 清子氏「掲載誌 保存」文字入
16	士郎直鑑原稿「好きなもの「カマボコ」」雑誌『酒』掲載	昭和33年1月号	士郎直鑑原稿	
17	士郎直鑑原稿「女壇酒徒番附」張出横瀬就任の弁 雑誌『酒』掲載		士郎直鑑原稿	
18	士郎書「我 賀茂鶴を受す」額	昭和29年新春	士郎書複製	賀茂鶴の販売促進のため作成されたものか
19	賀茂鶴酒造酒蔵 写真		写真	賀茂鶴酒造提供
20	賀茂鶴 特別大吟醸 双鶴		清酒 1升瓶	ラベルに士郎の書記載
21	賀茂鶴一合升「俵士君に捧ぐ 白虎隊 桜井駅の歌 聴きつ一代の夢を閉じにけるひと 完二」刻文入		賀茂鶴一合升 書刻文	「完二」は映画監督の菅沼完二?
22	賀茂鶴一合升 瓢々忌にて使用	昭和40年代	賀茂鶴一合升 瓢々忌	
23	平助書「士郎に与ふ 酒女 成仏」		書色紙	筆者不詳(作家の井房雄の可能性あり)
24	士郎受用 ぐい飲み			
25	士郎書のれん「春夢正に濃く 満街の桜雲 秋信先ず通ず 両行の燈影 喜運羊」	昭和40年代	のれん 士郎書入	料理旅館「喜運羊」が作ったのれん。士郎は女将羊と親しく「大竹屋」とともに吉良の定宿とした
26	旅館「大竹屋」にて宴会写真	昭和25年ころ		主人が士郎と親しく、家族ぐるみの付き合いがあった。
27	旅館「大竹屋」にて宴会写真	〃		
28	旅館「大竹屋」にて宴会写真	〃		
29	喜運羊にて使用の炭入			お座敷の火鉢用の炭を入れておくのに使用
30	喜運羊 名刺			女将が署名をしマッチ箱の包紙として得意客に配った
31	尾崎士郎作詞「吉良小唄」歌詞			喜運羊の女将羊の求めにより、士郎作詞
32	買菓 シントロ・ゲル			米国ホフマン・ロシュ社製